

「名言は韻がお好き」

レトリック試論 (2)

神谷 正彦*

Wise saying likes rhetoric hot — A study of Rhetoric (2) —

Masahiko Kamiya*

This is the 2nd study of rhetoric. It makes usually some words remembrance, by emphasis, refrain, rhyme and antithesis. Many books of wise saying have been published. But, filled with teaches and lessons. I don't care about them, can't take my eyes off fine words. They remain in my mind, encourage, impress and heal. This is an anthology of so fantastic words.

あるときふと脳裏に甦る言葉、というものがだれにでもあるだろう。努力して思い出そうとしなくても、テレビをぼんやり見ている時、誰かと話している時、辻占のように町行く人の会話が聞こえてくる時、そういう何でもない日常の中に不意に浮かぶ言葉の断片。前後に何の脈絡もなくふっと頭をよぎる言葉たち、たいして重要ともいえるわけでもないのになぜか思い浮かべてしまった片言隻句をいちど書き留めてみたいと感じていた。

しかし、思いつくままかき集めたのでは既存の名言集にも及ばない、「淀みのうたかた」になってしまふ恐れもなきにしもあらず。そこで、レトリック(修辞)を小気味よく取り込んである言葉、という篩にかけてみた。ここでいうレトリックは、押韻・対句・リフレイン(反復)としよう。なぜこの3つに限定したかという点、まだ仮説であるが、記憶に残る言葉というのはこういう表現技法を好むと考えられるからである。これで何とか「心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書き」つけた駄文もいちおう形になる

であろう。

さて、押韻とは一般に、韻文の中で一定の音を決まった位置に繰り返し用いて音調をととのえる、という技法だ。その位置は文頭なら「頭韻」、文末なら「脚韻」といい、特に漢詩の絶句や律詩では脚韻は基本ルールとなっている。

対句は、複数の文の品詞構成が同じで、その品詞、たとえば動詞や名詞が相互に対立とか相似とかという照応関係を持っている場合をいう。もう一つ、ここでは同語・類語の反復(リフレイン)も加える。強調効果をもつ技法である。

海が見えた

海が見える

五年振りに見る尾道の海はなつかしい

(林芙美子「放浪記」)

初句の、助動詞「た」が絶妙で感動の中心となっている。リフレインの例である。

山路を登りながらこう考えた

智に働けば角が立つ

情に棹させば流される

意地を通せば窮屈だ

とかく人の世は住みにくい

(夏目漱石「草枕」)

これは2句・3句が対句で漱石流の人生観を短くも端的に表わす。

"This is not the end.

It is not even the beginning of the end.

But it is, perhaps, the end of the beginning."

1942年のラジオ放送でW・チャールズである。韻も反復も対句も盛り込んで、限られた単語しか使っていないなくとも深い味がある。ふと、"One for all, all for one."を想起する。平易な語でも使い方ひとつなのだ。耳に残る言

*総合教育科

平成二十一年九月二十九日受理

葉というのは、易しい単語と表現技法のベストマッチが作り出すものであるう。

韻は、テンポよく、朗じやすくするためのたいせつな小道具である。

石走る垂水の上の早蕨の萌えいづる春になりけるかも

(万葉集 巻8 1418 志貴皇子)

大海の磯もとどろに寄する波われて碎けてさけて散るかも

(金槐和歌集 源実朝)

散る桜残る桜も散る桜

(良寛 辞世)

歯切れがよく、リズムミカルになる。しかし、詩人ではない大衆にも、マザー・グースがあり、童謡があり、諺があり、警句や落とし咄があるのだ。ほんの一部を示そう。

・ 楽は苦の種 苦は楽の種

・ 蝶のように舞い蜂のように刺す

・ 天使のように大胆に 悪魔のように細心に

・ よく学びよく遊べ

・ 百姓は生かさず殺さず

・ 年寄り笑うな行く道じゃ

・ 子供叱るな来た道じゃ

・ 人には添うてみよ 馬には乗つてみよ

・ 駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋を作る人

・ 初めは処女のごとくのちには脱兎のごとし

・ 京都三条糸屋の娘 姉は十八妹は十五

・ 諸国大名は弓矢で殺す 糸屋の娘は目で殺す

・ 飲んだら乗るな 乗るなら飲むな 注意一生 怪我一生

・ 消したはずでは燃えるはず

さて、詩人も大衆も韻を好む、という仮説はさらに広い分野に広げられないだろうか。たとえば、発明王トーマス・エジソンには、

Ninety-nine percent of inspiration is perspiration.

という言葉があるし、医学者クロード・ベルナールは「芸術は『私』、科学は『私達』だ。」と言った。また科学者には厳しいところだが、

Pubrish or perish.

もつとも、この言葉は業績至上主義ではなく、研究公開主義ともとれるのだが。

余談だが、キューブラー・ロス「死ぬ瞬間」(1969)にある、死の受容の5段階——否認・怒り・取引・抑鬱・受容——とか、ダンテ「神曲」の七つの大罪が韻を踏んでいたらどうであつたらうか。

思い起こせば、ベトナム戦争のさなかの1969年7月16日、遂に人類は月に降り立った。そのときアポロ11号の着陸船船長ニール・アームストロングが38万kmの彼方から電波に乗せて、

"That's one small step for man, one giant leap for mankind."

「小さな一歩」「偉大な飛躍」の対句といい、印象的なメッセージである。アメリカのテクノロジーの勝利宣言(米ソ宇宙開発競争での勝利)であつた。ベトナムでは通用しなかつたテクノロジーだつたが。

思うに科学者と名言至言は馴染まないのではなからうか。彼らが相手にするのはあくまでも真理や法則であつて人間ではないからであらうか。名言は人を動かすためにある。

ここでまた話があちこちするけれども、奈良県の吉野地方を旅したとき万葉の歌碑がいくつも立ててあつたがその中に、

よき人のよしとよく見てよしと言ひし

吉野よく見よよき人よく見つ

(万葉集 巻一 27 天武天皇)

「よ」の頭韻と「よし」の反復の紡ぎ出すリズム。旅する者の足を留めさせる歌である。

時代は下るが、これも似たレトリックで、

為せば成る為さねば成らぬ 何事の成らぬは人の為さぬなりけり

と詠んだのは、陽明学者の熊沢蕃山だ。

かつて受験戦争たけなわのころ、

一浪当然 二浪平然 三浪憮然 四浪蒼然 五浪慄然

と詠んだ、医学部浪人がいた。当時の浪人達は少し自虐的な思いでこんなことを口ずさんでいた。暗くて不安な毎日を茶化してしまいたかつたのかも知れない。これとて、レトリックがなければ筆者が30年以上も覚えているはず

もない。

古いところでいうなら、往年の名画「カサブランカ」。(1942 ワーナ
ー)ハンフリー・ボガート扮する主人公リックがかつての恋人イルザと再会
する。

「ゆうべどこにいたの」

「そんな昔のことは覚えちゃいない」

「今夜会ってくれる」

「そんな先のことはわからない」

あまりにも有名なシーンだが、映画の科白ではレトリックは用いられていな
いの、字幕ではきれいに韻を踏んでいるのは翻訳者のお手柄というほかは
ない。ナチの侵攻で、明日をも知れぬ緊迫した町の雰囲気まで感じられるほ
どだ。

さて、人を動かし人を従わせることを至上の命題にしている人々にとって、
言葉は武器以上の武器であった。その人々とは、政治家であり軍人である。
演説とレトリック、すぐに思い浮かぶのは、

"government of the people, by the people, for the people"

(エイブラハム・リンカーン 於ゲティスバーグ国立墓地

1863・11・19)

アメリカの暗部といわれる黒人差別を撤廃しようと、公民権運動を推進し
たジョン・F・ケネディ大統領も公民権法の立法化を約束するテレビ・ラジ
オ演説(1963・6・11)の中で、

我々は世界で自由の価値を説き、国内でも自由を尊重している。にもか
かわらず、「我が国は自由の地だが、黒人は例外」「差別はないが、黒人
は例外」「階級制度やスラムはないが、黒人は例外」などと言えるだろ
うか。今こそ真の自由をもたらすべき時だ。

と訴え、大統領就任演説(1961・1・20)でも、

"My fellow Americans, ask not what your country can do for you.

Ask what you can do for your country."

効果的な押韻を用いている。同じ頃、黒人の公民権活動家、マーチン・ルー
サー・キング牧師は、「I have a dream.」という印象的なフレーズを歴史

に残した。(ワシントン大行進の演説 1963・8・28)

ここに日本の政治家の演説を引用できないのは、はたして偶然なのか、必
然なのか。

解りやすい言葉を繰り返すことがいかに効果的であるかを熟知していたの
は、第二次世界大戦を起こした稀代の独裁者アドルフ・ヒトラーであった。
彼ほどプロパガンダによってドイツ国民を心理操作した者はいない。193
3年のプロパガンダ映画「ドイツ国民への呼びかけ」の演説でも、
"zehntausend(一万) = "eigenen(固有の)"を繰り返している。これはもち
ろん計算ずくであって、彼の口述した「わが闘争」(1925年)には「大
衆向けには解りやすい言葉を繰り返すのが効果的」と記されているという。

第二次世界大戦は、それ以前の戦争とはまったく様相を異にすることにな
った。大量殺戮兵器が次々と発明され、無差別爆撃や民族浄化によって、一
般市民をも犠牲にしようとする総力戦となったのである。資源が乏しく、工業生産
力も劣る日本はそれをカバーするために軍民挙げて大和魂を鼓舞し、精神主
義を強要した。その極めつきは、陸軍大臣東条英機が1941・1・8に示
達した訓令「戦陣訓」である。その一節、

生きて虜囚の辱めを受けず

死して罪禍の汚名を残すことなかれ

この、おぞましい対句はどうであろう。人命を鴻毛よりも軽視した軍部こそ、
「鬼畜米英」よりも鬼畜だった。人命軽視の掟は軍人はもとより、民間人や
敵国人の人命をも消耗品化してしまい、日本人を狂信的民族と思わせるに十
分であった。この、鬼畜の修辞とも言うべき戦陣訓のため、降伏できない日
本人は玉砕や集団自決を繰り返したのである。その結末は、

朕は時運の趨く所 堪え難きを堪え 忍び難きを忍び 以て万世の為に
太平を開かんと欲す

という悲痛な修辞で終わることになる。まさに、「歴史の陰に修辞あり」。

サンプリングを続けよう。ついに天下を取れなかった武田信玄だが、「人
は石垣、人は城、人は堀、情けは味方、仇は敵なり」(甲陽軍艦)で甲斐の

(1945 終戦の詔勅)

国をまとめた。彼の旗印には

疾きこと風の如く 其の徐なること林の如く

侵掠すること火の如く 動かざること山の如く

と、4句すべてが対句・脚韻をなしている。

戦国時代はじつに個性豊かな覇者がそろっていた。彼らの性格の違いを俳句にしたのが、

鳴かぬなら殺してしまえ時鳥 (織田信長)

鳴かぬなら鳴かしてみせう時鳥 (豊臣秀吉)

鳴かぬなら鳴くまで待とう時鳥 (徳川家康)

2句目だけに意匠を凝らすというところなど、巧みな技がある。しかし、これだけ性格が違う天下人を並べてみると、行く川の流れば絶えずしてしかもとの水にあらず、といった無常を感じてしまう。それはまた「平家物語」の世界である。

驕れる者は久しからずただ春の夜の夢の如し

猛き者も遂には滅びぬひとえに風の前の塵に同じ

武家政権を作るつもりが、いつの間にか貴族化して朝廷に取り入った。栄耀栄華の絶頂を極めたのもつかの間、今度こそ本當の武士団に滅ぼされるという「無常」がこの対句の中に凝縮されている。これは同じ内容を2つの文にし、同じ文構造を持つ対句法によって反復させて強調する用法だと考えられる。それは、

年々歳々花相似たり

歳々年々人同じからず

君子の交わりは淡きこと水の如し

小人の交わりは甘きこと醴の如し

のような、漸層法的な意味の対句とは似て非なるものだといえる。

さて、対句法や押韻という修辞は洋の東西や歴史に関係なく、つまり物理的空間的な隔たりや社会の階層や職種さえも超えたアイテムとして好まれてきたらしい、というところまでははっきりしてきた。またそれは、コミュニケーションの一手段として効果的な意思伝達のために用いられるらしいこともわかった。

しかし考えてみれば、この世界のじつにさまざまな事象に対応するために

は言葉はあまりにも少なく、表現できるコンテンツも情けないほど少ない。人間の五感、たとえば味覚や色覚でさえ、対象がさほど複雑でなくても言葉にしにくいものだ。(今食べたものの“味”なのにそれを表すのには苦労する)

だからこそ人間は、長い闘争の歴史の中で、争いを避けるために、『誤解されにくい』『論点が明確な』言葉を求め続けてきた。(当然、ごまかしの言葉も見つけてしまったが) そういう言葉にとって、対句・押韻・反復・比喩・倒置という修辞は重要であったと考えられる。

繰り返すけれども、言葉はほんとうに危険なツールなのだ。芥川龍之介流にいうならば、ことさら重大に扱っているのは役に立たないが重大に扱わなければ危険なマッチ箱(侏儒の言葉)のようなものである。どう危険なのか、具体例を挙げよう。

ある選挙公約で「人の嫌がることをすすんでやる」と謳ったら誤解されな

いか。

90才の老婆が病院を退院する日である。息子が迎えに来るのを待っているのだがなかなか来ない。付き添っていた看護師が「おばあちゃん、なかなか迎えがこないね」。

ある中学校で、いじめ問題をめぐって保護者会が開かれた。保護者から校長に質問が飛んだ。「もし、この学校でいじめがあつたらどう対応しますか。」校長は言下に「カテイの問題でしょう。」と答えたので会場は騒然となつてしまった。「仮定」と「家庭」の取り違えという些細な誤解が原因だったが、誤解がとけても険悪な雰囲気は消えず両者の間には不幸なしこりが残った。同音異義語は要注意だ。・・・これは市井の挿話。

これが国家間だつたらどうなるか。

太平洋戦争も大詰めへ来た1945年7月27日、同盟通信社は、連合軍が勧告したポツダム宣言を傍受した。当時の鈴木貫太郎首相は記者会見で「政府はこれを黙殺する」と発表した。敵味方どちらの誤訳だろうか「黙殺」は「ignore」と訳され、連合国側はこれを「reject」(拒否)と解釈して、態度を硬化させた。その10日後、広島に原爆が投下された。誤訳の真相は今なお不明である。

思えば、言葉は最も重要なコミュニケーションの手段である一方、けつし

て万能ではない。このジレンマに正面から向き合わなければならぬ、というのはじつに厄介なものである。しかし、そのジレンマを克服することを必要とする人が、このリスクな条件をクリアしてはじめて、名言が名言となるのだろう。福翁が「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」〔学問のススメ〕、孔子が「学びて思わざれば即ちくらし、思いて学ばざれば即ちあやうし」〔論語〕と言ったように。

最後に、筆者がこの小稿を成すにあたって想を与えてくれた、幾篇かの詩を紹介しておこう。その洗練された修辭を味読してほしい。北原白秋の「落葉松」(水墨集)より、

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつ的林を出でて、
からまつ的林に入りぬ。
からまつ的林に入りて、
また細く道は続けり。

三

からまつ的林の奥も、
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつ的林の道は、
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五

からまつ的林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり。
からまつとささやきにけり。

六

からまつ的林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうえに。

七

からまつ的林の雨は、
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山がはに山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。

草野心平「おれも眠らう」〔第百階級〕より、

るるり
りりり
るるり
りりり
るるり
りりり
るるり
りりり
るるり
りりり
るるり

るるり
るるり
りりり

中原中也「サーカス」(山羊の歌)より、

幾時代かがありました

茶色い戦争ありました

幾時代かがありました

冬は疾風吹きました

幾時代かがありました

今夜此処での一と殷盛り

今夜此処での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁

そこに一つのブランコだ

見えるともないブランコだ

頭倒さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋のもと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

その近くの白い灯が

安値いりボンと息を吐き

観客様はみな鰯

咽喉が鳴ります斬殺と

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外は真ッ闇 闇の闇

夜は劫々と更けます

落下傘奴のノスタルヂアと

ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

三好達治「雪」(測量船)より、

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

高見順「樹木(二)」(死の淵より)より、

枯れて

生きる

生きて

枯れる

立派に枯れる為に

壮んに生きる

星野富弘「きく」(四季抄 風の旅)より、

よろこびが集まったよりも

悲しみが集まった方が

しあわせに近いような気がする

強いものが集まったよりも

弱いものが集まった方が

真実に近いような気がする

しあわせが集まったよりも

ふしあわせが集まった方が

愛に近いような気がする

付記

対句や押韻を飾にして、忘れられない韻文や成句を集めてみたのだが、なかなか筆を擱くことができない。敢えて補足しておく。

「男はタフでなければ生きていけない。しかし優しくなければ生きてゆく資格がない。」と言った私立探偵、フィリップ・マローウ。

「ほめられもせず 苦にもされず そういうものに 私はなりたい」と謳った詩人、宮沢賢治。

「教えるということは、難しいことをわかりやすく。わかりやすいことを深く。深いことを楽しく。」と説く劇作家、井上ひさし。

「悲しいから泣くのではない。泣くから悲しいのだ。」と言った心理学者、

ジェームズ・ランゲ。

「散りぬべき時知りてこそ世の中の

花も花なり人も人なり」と辞世を残した細川ガラシャ。

“To be or not to be that is the question.”とは、ハムレットの科白。

「お世話になった人に感謝 お世話になってる人に感謝 お世話になるかもしれない人に感謝」と論じたわが恩師。

修辞とユーモアのサンプルも挙げておこう。

“Which key are you, monkey, donkey or Yankee?”

“Can I get ya anything? Tea? Coffee? Me?” (20世紀フォックス「ワーキングガール」)

まだ寝てる 夜帰ったら もう寝てる (投稿川柳)

なお、中村雄二郎は、その評論「術語集」で佐藤信夫「レトリック感覚」を引いて、レトリックの役割は『説得する表現の技術』『芸術的表現の技術』『言語的・共通感覚的な知』と規定している。筆者はこの説を支持し、ささやかなアンソロジーを編んでみたのである。

出典は本文中に記し、引用部の仮名遣いはできるだけ現代仮名遣いに改めた。

本稿を成すにあたっては、徳山工業高専の国重徹先生、本校の上江憲治先生にご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- 丸谷才一「桜もさよならも日本語」新潮社 1986
 鳥飼玖美子「歴史をかえた誤訳」新潮文庫 2004
 中村雄二郎「術語集」岩波新書 1984
 佐藤信夫「レトリック感覚」講談社 1978
 芥川龍之介「侏儒の言葉」講談社文庫 1972